一緒に行こうよ。

由実花は神妙な顔をして携帯電話と向き合っていた。届いたメールには既に返信したけれど、返信したからと言ってこのメールについて考える事がなくなった訳ではない。手は無意識に腕につけているブレスレットのチャームに触れていた。
どうしたものかと考えあぐねている由実花の思考を、ピンポンピンポーンッとインターホンの音が分断する。
この緊張感のない音色が連打した本人は今日も能天気なんだと教えてくれた気がした。
悩んでるのはあたしだけか。
その事実がなんだか悔しい気もしながら、由実花は玄関の鍵を開けた。
「たっだいま〜」
ドアの向こうには案の定お気楽な声とアルコールで赤らんだ顔。由実花の顔とは対照的だ。
「おかえり」
「えー、由実花ちゃんなに怒ってんの？声恐いんだけど〜」
へらへらと笑って言う彼は健市、一応…こんなだけど学生時代からかれこれ7年付き合ってきた由実花の彼氏。
「ケンちゃん、話があるの」
「お説教ならやだよーん、俺今サイコー気持ち良いんだから」
由実花は健市をキッと睨んでもう一度言った。
「大事な話があるからあっちに座りなさい」
「…は、はい…」
コタツの傍らに座った健市の向かいに座って由実花は息をついた。まずは自分が落ち着かないと。
「ケンちゃん、先月の事で私に何か隠してる事ない？」
「えー…と」
健市は思い出すような仕草をしながら由実花から目をそらした。こういう様子のときは大抵クロだと7年も付き合っていたら察しが着く。なにより今回に関しては事実を知っているからなおの事。
「高野君からメール貰ったんだけど」
その言葉に健市は不満そうに口を尖らせた。
「なんだよ、高野の奴…ちょっとメール返さなかっただけで…」
「ちょっとメールってどういうことよ？貴方、高野君から今月返すって言ってお金借りたんでしょ？もう今月終わるって判ってる?!」
思わず畳み掛けた由実花にうんざりとしたような視線を健市が投げかけてくる。うんざりしているのはこっちだ、と言いたいのを堪えて由実花は続けた。
「3万円で良いのよね？あたしから高野君に返しておくから」
「いいよ俺が返すから」
「返せてないから言ってるんでしょ？！ほんとに返す気があるなら後であたしに3万円返して」
むすっとした顔で健市は立ち上がると、そのまま玄関に足を向ける。
「ちょっとケンちゃん、どこ行く気？！」

「パチンコ」
「…そんなお金あるならさっさと高野君にお金返しなさいよ！」
叫んだ由実花の声は健市が乱暴に閉めたドアの音にかき消された。
あーぁ、またやっちゃった…。
一気に静かになった部屋の中で由実花はため息をついた。
お金の事でケンカをするのは初めてじゃない。社会人になってパチンコ好きの上司に付き合ってパチンコに行くようになった健市は、気がついたら自身もパチンコ好きになっていた。
パチンコなんてどこが楽しいんだろう。一度だけ連れて行ってもらったことがあったけれど、由実花にはその楽しさは全くわからなかった。働いたお金が一瞬で消えていくことの虚しさと恐怖の方が大きかった。

夜中、由実花はベッドに入っていたけれど寝付けずに居た。健市はまだ帰ってこない。もしかしたら今日は帰ってこないのかもと思いもした。
不意に聞こえた足音と玄関の鍵を開ける音に由実花は壁側に寝返りを打って目を伏せた。素直におかえりと言えるような気持ちにはなっていなかったから、寝たふりをしていようと思ったのだ。
チャリチャリとキーケースの鍵がぶつかる音、次いで机の上に何かを放り出す音。その後、由実花の隣に健市がもぐりこんで来る。
由実花と背中合わせに寝転がった健市の服からは、タバコのにおいがした。
「ユミ、いつもごめん」
「いくらスッたの？」
由実花が起きている事に驚いたのか健市の返答が少し遅れる。
「…1万…」
「馬鹿…」
「ごめん」
由実花はため息をついてずっと気になっていたことを口にした。
「ねぇケンちゃん。先月お金なくなったの、やっぱりあたしの誕生日だったから？」
先月の中頃、由実花の誕生日があった。そのお祝いでいつもは行かないような高いレストランのコースを食べに行って、ブレスレットを貰ったのだ。
高野からメールをもらった時、先月の出来事として真っ先に思い浮かんだのはそれだった。逆に言えば、それ以外普段と違う事はしなかった。いつもなら自分にお金を貸してと言う健市が高野に頼んだのは、自分の誕生日プレゼントのためだったからじゃないかと思ったのだ。
「あー…それは、…違う」
嘘ついてない？と言いたげな視線を投げた由実花に健市は気まずそうに続けた。
「ユミの誕生日までずっとパチンコ我慢してて、ユミの誕生日終わった〜ってパァっとやったら大負けして…。でもプレゼントした手前お前に金貸してとも言えなくてさ…」
はぁー、俺カッコ悪…と健市がため息をついたのに由実花はくすくす笑みをこぼした。
「そうだよねー。あたし、ケンちゃんカッコいいって思ったことない」
付き合い始めた頃から、調子ばかり良くて、サークル仲間で馬鹿をやって、そうして過ごした中で健市と一緒に居たら楽しいと思うようになって付き合ったのだ。よくよく考えてみたら『カッコいい』と言う観点で見たことなど一度もなかった。
「どーせ俺はかっこ悪いさ、大した仕事もしてないし、稼ぎも少ないし、パチンコよええし…」
「でも好きだよ」
ふてくされて自虐的になっている健市の言葉をきっぱりと由実花は遮る。ぴたりと健市の言葉が止まったのに由実花は口元に笑みを浮かべて、続けた。
「あたしは、ケンちゃん好きだよ。ねぇ、もうパチンコやめようよ」
「やめたら俺、休みの日何したら良いんだかわかんねぇよ」
「あそびに行こうよ、どこでも良いから」
どこでもいいのだ、遠くじゃなくても。

日曜日、カーテンの下から漏れてくる明るい日差しに由実花は一気にカーテンを開けた。由実花の背後でまだ布団を被っていた健市が、灰になると漏らして頭まで布団にもぐりこんだけれど、由実花は青空を見て微笑んだ。
「ケンちゃん、馬鹿言ってないで遊びに行こうよ」
「遊びにってどこだよ…俺、昨日の飲み会とパチンコで金ねぇよ…」
布団の下から健市の情けないくぐもった声が聞こえる。
「んもう、お金がないと遊べないの？」
「遊べないだろ」
聞こえてきた声がクリアな事に由実花が振り返ると、健市が顔だけ布団から出していた。どうしてこの人はやる事が締まりないんだろうと頭をよぎるけれど、それも含めた上で憎めないのだと判っている。
「金なきゃロクな所いけないだろ。上手いモンも食えないし」
それが昨夜パチンコで1万円スッてきた人のセリフ？と思うとなんだか可笑しくて、由実花は笑みを浮かべた。
「いいじゃん、お散歩しようよ。お弁当もってさ」
「さんぽぉ～？！」
27にもなって散歩かよ？と思っているのがありありとわかる健市の嫌そうな声と顔。
「うん、さんぽ。松戸行こうよ、松戸」
「俺の実家じゃねぇか。ヤダよ、いかねぇよ」
「ケンちゃんの実家に行くんじゃなくてー、ケンちゃんが子供の頃遊んだ所とかさ、ぷらぷら散歩しようよ」

行く所はどこだって良い、遠くじゃなくても、お金がないといけないところじゃなくても。
ねぇ、ケンちゃん。一緒に行こうよ。